

平成 21 年 5 月 27 日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18720084  
 研究課題名 (和文) 東アジアにおける〈アメリカ〉の記憶の現代日本のアニメーション文化  
 研究課題名 (英文) Memories of “America” and contemporary Japanese animation in East Asia

研究代表者  
 清水 知子 (SHIMIZU TOMOKO)  
 筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・講師  
 研究者番号：00334847

## 研究成果の概要：

冷戦体制期のアメリカと日本を中心としたメディア（とりわけアニメーション）のネットワーク形成に関する資料収集、インタビュー調査を通して、従来メディアの表象分析に限られていたアニメーション文化がその形成においてどのように冷戦時の情報外交、文化政策が関係していたかを明らかにした。イギリス、アメリカ、トルコ、インド、韓国、シンガポール、東京をはじめとした国際会議での発表及び意見交換をはじめ、別記にある論文、著書によってその成果をまとめた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,700,000	0	1,700,000
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	210,000	3,710,000

研究分野：文学・メディア論

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：アメリカ、冷戦、東アジア、メディア、記憶、アニメーション文化

## 1. 研究開始当初の背景

アニメーションをはじめとする現代日本文化は、今日グローバルなレベルで受容されている。しかし、それが冷戦期のアメリカ、及びグローバル化時代の東アジアにおいていかなる政治経済的、社会的、文化的な力学のなかで形成されてきたのかについては十分な研究がなされていない状況にあった。

申請者は博士論文の執筆を通じて、戦後の大衆娯楽文化を考える上で冷戦期の米国による〈文化〉の外交政策とメディアのネットワークの構築が非常に重要な役割を果たし

ていたにもかかわらず、いまだ実証的には十分にカバーされていないことを認識するにいたった。そのため申請者は「東アジアにおけるメディアの文化交通と公共性の再構築」、「多文化主義論争と公共性の再構築」をテーマに、これまで従事していた研究の方向性をさらに精緻化し、かつての〈西側〉における戦後の米国側のメディア文化のネットワークの形成について調査・研究を進めている最中であった。

その過程において、国際交流基金アジアセンター主催による「アジア理解講座」でテレ

ピアニメ「世界名作劇場」以降の現代日本におけるアニメと昨今の韓国映画の隆盛に関する講義と共著『超える文化、交錯する境界』の発表、宮崎駿をはじめとするスタジオジブリ映画とディズニーについて政治的、経済的、文化的見地から考察した論文を各種雑誌に発表していた。また2005年1月には日本のアニメーションを通して多文化主義と現代メディアについて台湾で講演を行うなど、日本、韓国、台湾をはじめとする東アジア各地域におけるメディア表象と多文化主義の行方について探求してきた。スタジオジブリをはじめとする宮崎駿論と台湾での講演は、これまでにない示唆的な見解として好意的な評価を得て、中国語に翻訳されて紹介されている。

以上の背景により、本研究によってこのテーマをさらに深化させたいと考えて申請した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、冷戦期において、ディズニーをはじめとするメディアのネットワークを米国の外交政策と政府文書を紐解きながら、米国がどのような政策に基づいてメディア文化を海外に流通させていったのか、そして日本のメディアがどのようにそれを受容していったのかを、同時代の東アジア諸国との政治経済的、文化的関係から実証的かつ理論的に検証することである。

## 3. 研究の方法

主に下記4つ方法によって研究目的の達成を目指した。

(1) 冷戦体制期の米国の娯楽メディア、とりわけアニメーションと情報外交に関する文献の網羅的な収集と解説。具体的には、米国東海岸の大学、メディア機関、公立図書館、シンクタンク等の適任者の紹介を受け、聞き取り調査を実施。

(2) アニメーションを中心とした大衆メディア文化活動については、実際に携わった監督、アニメーター、芸術家、知識人、下請け労働者、映画制作会社、編集者、読者、視聴者をもとに聞き取り調査を行うこととした。同時に散逸の著しい映像関連の資料を収集して資料的な空白部分を埋めながら、冷戦期の米国のメディア政策と日本のアニメーション産業の政策的な交渉について検証していくこととした。

(3) アニメーションの制作と作品の文化表象の読解分析。原作とのあいだにどのような文化的翻訳、イメージの変換がなされたか、それが国を横断するときどのような意味を

もることになったのかを徹底的に検証。

(4) 上記(1)～(3)を踏まえた上で現代日本のアニメーション文化が東アジアにおいていかに受容・消費されたかをインタビュー調査を中心に冷戦期の米国と各国との関係、および日本との歴史的、政治的関係を再考しつつ徹底して検証していく。

## 4. 研究成果

本研究は、冷戦期のアメリカの文化政策、同時期の日本のメディア、アニメーション政策とその現場、そして冷戦後の東アジアにおける受容と消費の現状について、丹念に資料を収集、分析し、かつ製作者、視聴者のインタビューを通じて、そこにどのような政治的、文化的な力学が働いているのかを多角的に分析することができた。下記にあるように、その成果は、国内外を問わず、数多くの研究発表、シンポジウムでの議論及び論文発表によって知的な基盤を整理した。

とりわけ、2006年のトルコ、イスタンブールでの発表、2007年のインドバンガロールでの発表、韓国で行われた国際シンポジウム「東アジアにおける冷戦文化のダイナミクス：1960～70年代の冷戦期における地域文化の変容と国民国家の文化政治」での発表は、アジアの多くの研究者と貴重な議論を交わすことができ、その後成果をまとめる上で多大な示唆を受けることができた。

研究の進行としては、一年目、二年目は日本と米国について研究の基盤となる情報・資料収集とその分析に努め、三年目はそれらを踏まえた上で東アジアに視野を広げながら日本と東アジア、アメリカと東アジア、東アジアにおける日本の記憶と文化受容、東アジアにおけるアメリカの記憶と文化受容、そして東アジアにおいて日米の文化の記憶と受容のあり方の差異と受容・変容のありようについて探っていった。また東アジアでは、近年とりわけ中国がこれまでになく政策的に文化に力を注ぎ、多様な展開を繰り広げている。そのため、上海に赴き、現地のメディア状況に関する貴重な意見・情報を得ることができた。

今後はここで築いた知的基盤をもとに、文化、メディアに対してこれまでになく大規模に国家的な展開を進めている（現在の中国に代表されるような）現状を踏まえながら、よりグローバルな視点から考察を深めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

(1) 清水知子「写真=生——中平卓馬と「人間」の外、言語の外」『道の手帖 中平卓馬』査読無、76-85頁、2009、

(2) 清水知子「冷戦のアポリア——スパイの老舗と監視の〈眼〉」『寄せ場』査読有、21号、130-154頁、2008年

(3) 清水知子「ナチュラリストと〈漫画映画〉の時代」『唯物論研究』査読無、104号74-101頁、2008年

(4) 清水知子「ネズミは踊り、ドイツは笑う——絶望の深淵でなぜ動物が召還されるのか」『東西南北 2008』査読有、130-149頁、2008年

(5) 清水知子「〈英文学〉の解体か、再生か—ブッカー賞という文化装置」『比較文化論集』査読有、第3号、46-57頁、2007年

(6) 清水知子「〈世界の果て〉で竜と舞う—魔術的現代の苦悩と希望の旅路」『ユリイカ』査読無、第38巻9号、125-138頁、2006年

(7) 清水知子「吾輩はネコであり、ネコでない」『新現実』査読無、第4巻、98-114頁、2007年

(8) 清水知子「誰が文化を盗むのか?—現代イギリスにおける「多文化主義」と陥穽」『寄せ場』査読有、第19号、43-65頁、2006年

[学会発表] (計11件)

(1) 清水知子, Artificial Beauty and/or the Reflexive Body: Post-cultural Politics in Contemporary Japan, THE TWELFTH ASIAN STUDIES CONFERENCE JAPAN, 2008年6月21日、立教大学

(2) 清水知子, The Cultural Cold War and the Birth of Studio Ghibli, Dynamics of Cold War Culture in East Asia: Cultural changes in the region during the Cold War in 1960s-70s and Cultural Politics of Nation States, 2007年4月21日、Paichai University Academic Support Center (韓国)

(3) 清水知子, Who is Stealing My House?, Entitled: The Photography/Text Interface in Japan and Beyond, 2007年5月3日、University of Toronto (カナダ)

(4) 清水知子, 「多文化共生社会の想像力とそのパラドクス」、カルチュラル・タイフーン 2007、2007年7月1日、ウィルあいち 愛知県女性総合センター

(5) 清水知子, The Cultural Cold War & the Politics of Japanese TV Animation, Ubiquitous Media: Asian Transformations Theory, Culture and Society 25th Anniversary Conference, 2007年7月15日、東京大学

(6) 清水知子, Mimic Children and Visions of Suburbia, The 18th Biennial Congress of International Research Society for Children's Literature, 2007年8月29日、京都国際会議場

(7) 清水知子, 「冷戦のアポリア——スパイの老舗と監視の〈眼〉」日本寄せ場学会、2007年11月25日、筑波大学

(8) 清水知子, “The Cultural Cold War and the Birth of Studio Ghibli Culture,” (Asian Cinema: Towards a Research and Teaching Agenda), 2007年2月2-4日、バンガロール (インド)

(9) 清水知子, 「吾輩はネコであり、ネコでない——動物とアニメーションを結ぶ視座」(文化交流会シンポジウム)、2007年2月7日、筑波大学

(10) 清水知子, “The Politics of “Upside-down and Inside-out,” The Shut-In as Ethnographer, Miyamoto Ryuji and Abe Kobo,” (The 58th Annual Meeting of the Association for Asian Studies), April 7, 2006、国際基督教大学

(11) 清水知子, “Discovering Nature's Voice in Contemporary Animation Culture,” (Association for Cultural Studies Crossroads Conference,) 2006年7月20-23日、İstanbul Bilgi University (トルコ)

[図書] (計2件)

(1) 清水知子「グローバル化と多文化主義の現在」、「文化の移動と再文脈化」『よくわかるメディア・スタディーズ』伊藤守編、88-91頁及び94-95頁、ミネルヴァ書房、2009年。

(2) 清水知子「家族写真、アメリカ、資本主義——ドゥルーズ／ガタリとともにダイアン・アーバスを」『ドゥルーズ／ガタリの現

在』平凡社、625-647 頁、2008 年。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

清水 知子 (SHIMIZU TOMOKO)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・講師

研究者番号：00334847